

# 白金葭

6月号



平成28年6月発行

第64号



あかくと夏の満月上りたり  
夏草に夢中の羊揉んでやる  
沢潟の見分け易しや丈と色

鶴の巣を離るる親の鳴きながら  
良寛のいろはと書かれゆずの花

山羊小屋の日当るところ夏の蝶  
夕風の殊に荒れをり鶴の声

柚子の花風呂の焚口ほど近く

吉羽多美子

短夜の夢に思ひつきり笑ふ

柚の花や昔庄屋の長屋門

沼の風あびて聞き入る鶴の声

夕顔を咲かせ晴耕雨読かな

紫陽花や生きたくはなし死にたくも

柚子の花ひと日は雨にひと日晴る

倉田紀子

光みち  
いくすじも地球に鱗や夏の月（地震）

松村幸一

こゝろには今も棲む人柚子の花  
白鳥も鶴も子連れや梅雨深く  
桜桃忌死ぬまで戦後終らざる  
糠床に手を入れをればほととぎす  
密豆のくさぐさ今も夢ありぬ

武者昭七

鶴の巣の蘆間に在りと札の立ち  
純白の柚子の花咲く田園道  
日照り空空の青さを嘆くひと  
由比ヶ浜歓声湧きて夏は来ぬ  
紫陽花のしなだれている更地かな

麦藁細工の指輪をもらふ戯れに  
夏木立鹿のたむろの東大寺  
藍汁に白布くぐらせ夏来る

いくすじも地球に鱗や夏の月（地震）

浅野正美

葦原に声をたよりに鶴搜す

かたまりて白い五弁の柚子の花

紫陽花のパステルカラー地を覆ふ

十薬を抜く手に香り残りけり

紫陽花の毬の寄り合ひ競ひ咲く

蒸し餃子仮の薄目に似ていたり

ぎよぎよと鳴くは葭切葭ねぐら

水具合田んぼの見廻り軽トラで

葭切が呼び合つてゐる日暮かな

鶴などは見たことのない十二橋

柚の花を間引く獻上の柚子の木の

無住寺の賽銭箱に蛇の衣

親の鶴純白の斑を子に誇る

辻々を淨む祭の紙吹雪

パンプスの揃へてありぬ梅雨の崖  
選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

孝三

多美子

幸一

宏之助

みち

紀子

陽一

高志

孝三

高志

幸一

啓泰

みち

みち

多美子

柚の花や昭和の湯殿暗かりき  
4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4

無住寺の賽銭箱に蛇の衣  
糠床に手を入れをればほとどぎす

柚の花や昔庄屋の長屋門  
夕風の殊に荒れをり鶴の声

藍汁に白布くぐらせ夏来る  
手賀沼の水を平に鶴の列

噴水の夜は上らず牛飼座  
柚子の花ひと日は雨にひと日晴る

柚子の花やひそかに参る疣地蔵  
ゆるやかに浮巢の廻る利根水系

あかくと夏の満月上りたり  
早苗饗を畳んで眠る泥のごと

夕波の川面一羽のはぐれ鶴  
白鳥も鶴も子連れや梅雨深く

葭切が呼び合つてゐる日暮かな  
山羊小屋の日当るところ夏の蝶

親の鶴純白の斑を子に誇る  
柚子の花風呂の焚口ほど近く

夏の夜の夢に思ひつきり笑ふ

短夜の夢に思ひつきり笑ふ  
 夏草に夢中の羊揉んでやる  
 柚の花や母在りし日の古簾笥  
 日照り空空の青さを嘆ぐひと  
 桜桃忌死ぬまで戦後終らざる  
 沼の風あびて聞き入る鶴の声  
 沢潟の見分け易しや丈と色  
 蒸し餃子仏の薄目に似ていたり  
 夕顔を咲かせ晴耕雨読かな  
 水具合田んぼの見廻り軽トラで  
 (水番の見廻り小型トラックで)  
 かたまりて白い五弁の柚子の花  
 ここには今も棲む人柚子の花  
 跖に風が纏る虞美人草  
 鶴の巣を離るる親の鳴きながら  
 紫陽花や生きたくもなし死にたくも  
 紫陽花や生きたくはなし死にたくも  
 パンプスの揃へてありぬ梅雨の崖  
 ぎよぎよと鳴くは葭切葭ねぐら  
 葦原に声をたよりに鶴捜す  
 葦原の声をたよりに鶴捜す  
 紫陽花のしなだれてい更地かな  
 鶴などは見たことのない十二橋

高志	昭一	幸一	多美子	多美子	高志	昭七	幸一	高志	昭一
宏之助	昭七	みち	孝三	みち	正美	啓泰	啓泰	啓泰	啓泰
正美	正美	正美	多美子	多美子	正美	正美	正美	正美	正美
昭七	昭七	昭七	昭七	昭七	昭七	昭七	昭七	昭七	昭七
啓泰	啓泰	啓泰	啓泰	啓泰	啓泰	啓泰	啓泰	啓泰	啓泰
宏之助	宏之助	宏之助	光成	光成	光成	光成	光成	光成	光成
正美	正美	正美	高志	高志	高志	高志	高志	高志	高志

夏木立鹿のたむろの東大寺  
 紫陽花のパステルカラー地を覆ふ  
 献花せり頭垂れざり夏の雲  
 由比ヶ浜歎声湧きて夏は来ぬ  
 良寛のいろはと書かれゆづの花  
 鶴歩む浮葉は水を押へつつ  
 辻々を浄む祭の紙吹雪  
 純白の柚子の花咲く田圃道  
 十葉を抜く手に香り残りけり  
 密豆のくさぐさ今も夢ありぬ  
 いくすじも地球に鱗や夏の月 (地震)  
 紫陽花の毬の寄り合ひ競ひ咲く  
 鶴の巣の蘆間に在りと札の立ち  
 東京タワーも通天閣も梅雨のなか  
 柚の花を間引く献上の柚子の木の

**噴水の夜は上らず牛飼座**  
 噴水は夜上がらずその天上には牛飼座が上つている  
 という句である。「突き抜けて天上の紺曼珠沙華」のモ  
 チーフの夜版と思う。昼間の噴水の余韻があつて、夏  
 の星座を見あげる涼しさが感じられる句である。高原  
 での作ではなかろうか。この星座で一番目につく星と

紀子 正美 孝三 みち 幸一 昭七 陽一 陽一 陽一 陽一  
 宏之助 正美 紹子 光成 高志 光成 高志 光成 高志 光成 高志

云えは、牛飼の裾の所にオレンジ色に輝く一等星アーチトゥルスだ。麦刈りの頃、真上に輝くので、日本では麦星と呼んでいる。よく晴れた高原の夜ではこの麦星を頂点の一つとした春の大三角がみられよう。さらに真上に大熊座の北斗七星が見える。これらが西に隠れると、天の川がかかり十字形の白鳥座が現れる。盆がきて夏も終わる。十代に生家で眺めた夏空が年を経るほど懐かしくなつてくる。

### 早苗饗を畳んで眠る泥のごと

早苗饗はもともと田植が終わったあと田の神様を送る神事であるが、現在では田植仕舞いの祝宴になつていて。田植機で済ましてしまうこの頃では早苗饗もしないのではなかろうか。掲句は手植えの昔を回想して詠んだ句だ。私の郷里では、田植ご馳走(ごつとう)と呼んで近所数軒で祝つていた。主婦はご馳走を作つて振る舞わなければならない。青ぬたや鮎や山帰来餅をつくつたりした。てんてこ舞いの忙しさである。田植作業の疲れも云つてはおれない。早苗饗を畳んだらもう泥のように眠るのである。下五はなくもがなであるが、田植の縁語として敢えて使つたのである。

### 無住寺の賽銭箱に蛇の衣

宏之助

### 孝三

きくなるので、豊穰と不滅の象徴として、脱ぎ捨てた皮でさえ、財布に入れておくと金運が高まると信じられている。いい所に蛇が脱皮したものだ。将来きっといいことがあってこの寺は榮えるに違いない。私もあやかりとう存じてますとて、賽銭箱に千円札でも入れたに違いない。宏之助さんらしいあたたかいユーモアも漂う佳句である。(この度の記念号でも昭七さんのエッセイに海を渡る蛇、ヤマタノヲロチのことなどが出てくる。じつくりと読めば必ずや蛇が怖くないとわかります。私のベンヌームの由来、品幸遅和氣命(ホムチャケノミコト)も書かれてあるので私は驚いた覚えがあり、又読んで思いを新たにした。これは蛇足であるが、書いておきたく書きました。)

### 純白の柚子の花咲く田園道 かたまりて白い五弁の柚子の花

昭七  
正美

柚子は香りがよく、正月料理や柚子湯などになくてはならぬ柑橘である。私は毎年田園の端の水神様の裏に立っている柚子を頂いていた。今年ようやく苗木を買って狭庭に植えた。活着して五月に入つて白い五弁の花を咲かせた。六月には実をつけている頃なので、兼題としてはちよつと遅かった。二つの句とも、いわゆる写生句である。柚の花の花言葉は「健康美」汚れない人「恋のため息」であるとか、これを知ると、「朝日にはふ山桜花」の歌に通ずるもののが立ち上がりてきて、そ

住職のいない荒れた寺の賽銭箱に蛇の脱皮した衣が懸っているというのである。蛇は脱皮を繰り返して大

の余情にひたらせてくれる。季語のよく働く句はいい。

### 一句鑑賞

武者昭七

### 柚子の花や昭和の湯殿暗かりき

孝三

### 柚子の花風呂の焚口ほど近く

みち

風呂場の佇まいも今はすっかり変わってしまった。タイル張りの床と壁。ステンレスのぴかぴかの浴槽、ひねるだけで自在なシャワー。しかし作者はそんな浴室に身を置きながらふと思いつく。幼かつた頃の湯殿と呼ばれた風呂場（浴室ではない）である。その多くは別棟であった。木の湯船に木の簀子。無双窓からは月の光だつてさしこんできた。焚口の煙やら季節季節の花の香りも流れこんできたものだ。時には「草枕」の一節のよう湯けむりをまとった白い裸身さえ浮かびだした。焚口に身をかがめて湯加減をみるのは家人のつとめだった。ちかくて遠い昔である。

### 親の鶴純白の斑を子に誇る

宏之助

鶴の体は全体に黒いけれども脇腹に白い斑模様がある。その斑模様を親鳥がいかにも誇らしげに幼鳥に見せているのである。「ご覧！ドオ。お母さんの綺麗でしょう。素敵でしよう。」もちろん作者の感情移入であるけれどもいかにも楽しい。小動物に注がれたまなざしが優しいのである。

### 柚の花や昔庄屋の長屋門

多美子

庄屋は江戸時代の町人の頭ともいうべき役柄だが両脇に長屋を抱えた堂々とした屋敷を構えていた。「昔庄屋の」とわざわざ「昔」の一語をいいそえた技が句に一層の風格と重々しさを生んだ。長屋門の脇の柚子の樹もおそらくそれに劣らず年月を経た大樹であろうと想像される。ゆつたりと落着き払つたりズムも時間の流れをとらえて心地よい。

### 蒸し餃子仮の薄目に似ていたり

啓泰

口に放り込もうとつまみあげた蒸餃子の皮の合わせ目が合うと、なんと半眼を見開いた仏の目にあんまりよく似ていたのでぎよつとしたというのである。これでは餃子ものどを通るまい。「仏の薄目」というとらえかたも滑稽だし、聖俗こねあわせてこれぞ俳諧という感じ。（早く作者の元気な声を聴きたいと思ひます。）

### 一句鑑賞

飯田孝三

### 噴水の夜は上がらず牛飼座

陽一

日中、公園や街の広場で、燐々と水飛沫を上げる噴水も、夜間はどこも止まり、静まり帰る。見上げる天頂に夏の星座が懸る、その名は牛飼座。夜の天体に水車の飛沫を配する構図は他に見るが、噴水の止んだ後の、広大な星空の物語を取り込んで詠じた句は知らぬい。きらめく星座を仰いだ心をうたう句、人間の詩で

ある。星とその物語は高志さんが詳しい。「六月の星出そめぬ砂利置場」、こちらは戦後間もない誓子の句。

### 葭切が呼び合つてゐる日暮かな

啓泰

葭切はふつう大葭切をいい、水辺に棲む。別に小葭切は高原の鳥。前者は、騒がしく呼び交わす鳴声から、俗に別名「行々子」、掲句はそれだ。陽一さんの話では、鳴声は求婚の轡りならぬ、実は、縄張りの主張し合いとの由。すかさず取り合わせる「日暮」が面白。たそがれどきは人恋し、鳥も愛の相手を呼ばうかと思いつや・・。止め「かな」に込める、そ知らぬ諧謔が抜けている。

### 親の鶴純白の斑を子に誇る

宏之助

鶴は大鶴と小鶴とがある、純白の斑というから後者だろう。額は赤く、下腹の白羽が目につく。湖沼、河川、水田などに生息、公園の池でも見られる。一季に一々三回繁殖する。葭原などに営巣し、闖入者があれば、下尾の白斑を見せて威嚇する。掲句は現場の囁き吟だろうか、頼もしくも格好いい。

### 藍汁に白布くぐらせ夏来る

紀子

「白布」を藍甕に浸し、空中に晒すと紺色に染まる。昭和十年前半だが、近くの紺屋の高櫓に幾筋もの染布が靡いていたのを覚えている。掲句は、天下の山に干す白妙の衣に代えて、風になびく草莽の紺の染布を

詠う。「白布くぐらせ」と藍匂う、染物の現場を描くのだが、古歌をふまえ、その先の光景を想像するのもいいだろう。“白妙の衣”は、当に夏の到来を知らせる標だけれど、晴天の風に翻る藍染の幾流れも、紛れなき初夏の風物詩である。

### 夕風の殊に荒れをり鶴の声

みち

鶴は大鶴と小鶴、普通にいう鶴は後者で、共に縁種〔野鳥歲時記〕山谷春潮著）。鳴声（繁殖期）は、前者がケツケ、キユツ、ピツ、後はクルルツ、キユル、俗にいう鶴の笑い。どちらも集団で沼沢に隠れすむ。水辺の風はよく夕方に強まる、折しも吹き荒れる葭の繁みに鳴き交わすのである。まことに情景を捉えて、鶴の生態をつく。「殊に」は「夕風」と「鶴の声」の両方にかかるとみたい。「鶴の声」がはつきりと聞こえる。柚の花やひそかに参る疣地蔵

### 柚の花やひそかに参る疣地蔵

高志

「柚の花」は香ばしい白い花、うすい紫色をおびる。古来紫は高貴な色。ひきかえ疣は、病だれに尤、文字どおり嫌われ物。「疣地蔵」は、別名疣取り地蔵、祈願をこめると疣を取つてくれると信じられ、各地に伝わるお地蔵さん、土俗の信仰仏である。終始、際立つ対照ぶりが滑稽、また「ひそかに参る」洒脱さが愉快である。「や」が決まる。してやつたり、高志さんの得意顔が見えるようだ。

（出句一覽掲載順）

## 一 句鑑賞

### 無住寺の賽銭箱に蛇の衣

増田陽一

宏之助

無住寺の住職は居ない、寂れた寺を思われるけれど、また、村びとの間で大切に守られているかも知れない。そここの賽銭箱に蛇の抜け殻が懸つてゐるというのは面白い。時には寺に棲みついた蛇を丁重に扱つて鷄卵を供えたりする布施弁天などの例もある。蛇の衣を入れておくと財布の錢が増えるともいうし、本堂に住む古い蛇なら縁起の良いことでもあろう。

### 白鳥も鶴も子連れや梅雨深く

幸一

この「白鳥」は手賀沼にも多く棲みついている瘤白鳥と見られる。普通の白鳥なら遠くシベリア辺りで子育てをしているのだろう。今は瘤白鳥も鶴も難を育てる水辺の季節である。言外に軽鴨も鳩も葦五位も繁殖期で・・・と、沼の豊穣な自然が暗示されている。

### 柚の花やひそかに参る疣地蔵

高志

疣地蔵といふものがある。靈験あらたかという言い伝えで、なんで「密かに」参るかというと、恐らく思春期の子の羞恥心。どこかに疣が出来て悩んでいるのだろう。柚子の花がひそかに香よつてゐる、という情景。「疣地蔵」「ひそかに」と、軽い諧謔が面白い。

孝三

んで嘆いている（？）という完璧な時事句である。でもまあ、広島まで来ただけでも大出来と言えようか。みち

### 山羊小屋の日当るところ夏の蝶

みち

山羊など、動物の臭気の染み付いて古い小屋などには蝶がよく集まる。平地ならルリタテハ、ジヤノメチヨウの類、北国や高原ならクジヤクチヨウからオイチモンジまで、という具合に、蝶の生態が偲ばれて楽しい。

### 鶴の巣の蘆間に在りと札の立ち

昭七

公園にある池ほとり、通行人に鶴の巣があると教える札が立つてゐる。観察を薦めると同時に、鳥の繁殖を邪魔しないように見守つて欲しいという願いもある。「野鳥の観察」は趣味として人気があり、よく水辺に高級そうな望遠鏡とカメラの列を見ることがある。観察グループは解散前に「鳥あわせ」といつて各自目撃した種類の名を発表しあつて満足する。おなじ自然相手でも、採集し針をさして標本にする蝶の研究者はよく野鳥の会から非難される。

### 紫陽花や生きたくはなし死にたくも

多美子

紫陽花の頃、雨降りやまず暗く蒸し暑い。誰しもが陥る生活の倦怠感だけれど、死んでやる、という程の氣力も無いのである。これは紫陽花という花のせいだと言う。挿木で幾らでも繁殖し、青といつても翳があ

### 献花せり頭垂れざり夏の雲

ああ、言わてしまつた、と海の向こうでこれを読

つて湿潤の、蝸牛だけが喜ぶ梅雨の精。氣を取り戻すにはいま少し、梅雨明けを待ちたい。

### 俳窓評論纂

\*彩の佐藤恵子さんより句集が送られてきた。ひろし先生の紹介らしい。「藍甕」という句集である。カバーに綺麗なカラーのこれは油絵の写真がついている。恵子さんは絵もうまい。私は藍甕に直ぐ思いが至った。従兄が藍甕で絹の糸を染めていたのを思い出したからである。ずらり並んだ甕に糸の束を浸けたり出したりしていた。いつも顔に藍の飛沫を付けていた。恵子さんはどこで見られたのであろうか。句についてはひろし先生の序文に詳しく書かれてある。今、悦子さんが亡くなられたという知らせがあつたので、句の紹介は次号にしたい。次の中村抜刀子さんの句集に触れるが、恵子さんとも東京天狼句会で一緒にいた筈で、また同じ年の遠星集作家であった。そういう縁もあるので、何かの機会にお会いできるものと思っています。

\*宏之助さんから中村抜刀子さんの句集「天も地も」をお借りした。上の句会の思い出を宏之助さんと何かについて話し合つたが、その中でいつも抜刀子さんのことが出てきた。怖い名前の人気がいたとか云々と。句集の序文の誓子先生のさっぱりした評文、私の書く文章

は鷗外流と自分史に書かれていたが、真にそうである。栄の寄稿文を読めば抜刀子さんの人生がよくわかる。シベリア俘虜時代の「凍土」五〇句で昭和五〇年度コロナ賞を受賞された。この句集には一〇句のみ載せられた。これも厳選である。昭和五八、五九年のいくつかの句を紹介する。

里神樂命みことの他は蓑を被ず

長瀬の馬車馬今日は祭馬

三宝に山盛りの針供養する

暗闇祭昔はまこと暗かりし  
一枚の紅葉載せあり緋毛氈

祭にて武甲石灰山あくやま発破無し

妻病臥ただ見るだけの初鏡

霧閉ざす天地の境天も地も  
(誓子先生傘寿記念特選)

去年今年川流れゆく切目なく (S 64 一月東京天狼句会)

ブルドーザー首がくと垂れ年を越す (リ)

最後の二句は私も出席した句会での誓子先生特選と入選句である。ブルドーザーの句は納得した。この日の誓子先生の句は

青海苔の一劃何疊敷座敷  
であった。その時のノートのメモに「抜刀子さんと馬が合う。一句選び一句選ばれる」とある。しばらくし

て句会にお出でになられなくなり、それきつりとなつたが、ここで宏之助さんのお蔭で句集にて再会できたのは僕倖である。

\*季語「青隙田」を詠もうという題で飯田孝三さんから書簡を頂いた。左に全文を掲載します。

本誌第63号で、高志さんが季語「青隙田」を提唱されている（「俳窓評論纂」欄）。それを読んで、心底共鳴した。植田から青田に至る時の推移と田の変貌目に物見させてくれるのだ。時の“間あわい”は“隙いとま”、「隙」間は「透」間に通じ、一面に緑まだ疎らな水田を繰り広げる、口誦「アオスキタ」の響きも涼しく、田面を吹きくる風が頬に快い。「間」の微妙に感じる句は高志さんの引かれる名村早智子の作や片山由美子のそれ（注）などがあるけれど、季語はない。雪月花の全きもさりながら、その間の美に惹かれ、愛してきた民族の心延ばえは、はていづこに。

### 登校駅ホーム下まで青隙田

孝三

僕らの母校は、元旧制東京府立第十一中学、常磐線綾瀬駅から徒歩数分の所にある。校舎が青山の仮校舎からそこに移った時に、同駅は生徒の登下校駅として設けられた。なにせ戦時体制下、諸物資節約、駅舎も階段・プラットホームも全て木造。僕が通つたのは、すでに新制高校になつた昭和二十年代前半だが、当時

はまだそのままだった。駅周辺の砂利道は綾瀬川の堤や田中の道に続き、夏の晴れた日、プラットホームに立つと、一面の水田を渡り来る風に、心が洗われる気がした。昭七兄も同窓同級。駅界隈は今や一変したが、季語「青隙田」が呼び覚ましてくれた記憶である。季語「青隙田」を詠み、広めたい。（とはいへ、東京近辺では田圃はめつきり減つた、いきおい回想の句になるけれど。）拙句は、提唱をうけ口をついたのだが、結は「青田かな」「青田波」もありうるだろう。しかし、それでは「駅ホーム」が翳み、「隙いとま」の機微は失せる。やはり「青隙田」が相応しい。他の季節の景色は甦る記憶の中にはない。つい自句講釈、ご寛恕を。

（注）植田より青田に変わる頃の風（名村早智子）  
まだものののかたちに雪の積りをり（片山由美子）

（飯田孝三—6・6）

以上が孝三さんの全文です。我が家の方は手賀沼干拓地の青田が千葉ニュータウン迄続く大青田原になつています。最近はボランティアとして隣の犬の散歩道としてよく歩きます。青隙田は五月の黄金週間の植田の早苗が活着して梅雨に入る頃まで大凡一ヶ月間見られます。緑の条なす早苗の間の水面がまだまだ目立つ時期です。植田を越して青田にあらず、青田波も起らない、隙々の青田、それでいて緑の条はしつかり

しています。沢潟の目立つ田もあります。鴨が居たり、鳴が来たりします。無理して作句した私の句は左です。

金色に条の輝く青隙田

(6.23 高志)

沢潟の抜きんでてゐる青隙田

(6.23 高志)

お便り広場

(到着順、敬称略)

高志様 ただいま白金葭五周年記念号をいただきました。ありがとうございます。改めて「おめでとうございます」と、申し上げます。248ページという実際に堂々たる書籍で感銘いたしました。「ご夫妻の5年間のご精進が偲ばれます。これからゆつくりと拝読させていただきます。とりあえずお礼まで。出版記念祝賀句会、喜んで参加させていただきます。

(興正拝  
5.27 Eメール)

白金葭五月号と特別号拝受致しました。記念号は光成さんの「芭蕉の軽み以後」は今迄に記載されていた再編のやうで非常にあります。もつともなかく読みませんが良いことです。奥の細道はいつか書いたと思ひますが、西行の「終宵嵐に波をはこばせて月をたれたる潮越の松」で生徒と大論争、先生が皆は私の説をとり、あなたはあなたの解釈をとケリをつけました。岩田九郎の「奥の細道詳講」を先生はいつも持つてきておりました。私は大分たつてから古本で求め

ました。六月末は欠席させて下さい。(5.28 小山陽也)

(西行の歌で何が大論争なのか分りません。後で教えて下さい。

あの歌は蓮如上人の歌ということになっています。私の今回の文章は奥の細道まで行つていません。どうか一読なさつてご感想をいただければありがたいです。高志)

拝啓 新緑から深緑へと変わり行く木々の美しさに

感動する毎日です。皆様には、その後も元気でご活躍のことと推察申し上げます。さて、本日(五月二十七日)合同句集「白金葭」が届きました。出版並びに五周年記念、誠におめでとうございます。小生など、時折しか参加しない、非常勤者の作品まで取り上げていただき、深く感謝いたしております。とても良い記念になります。未だ、ばらばらと拾い読みしただけですが、その内容の豊富さと装丁の立派なことに、まず、驚かされております。予想をはるかに超えたもので、じっくりと楽しみながら、読ませて戴きます。吟行を共にさせていただいた「吟行句撰集」はもとより、「俳句撰集」「兼題選句集」も、お顔を存じ上げた方も増えてきましたことから、楽しみなことです。貴兄の御研究の成果「芭蕉の軽み以後」も俳句の勉強になると期待しています。その他、諸兄のお人柄が現れていると想像されるエッセイ集なども味わいたいと存じます。本当にありがとうございました。また、出版記念祝賀会にお誘

い戴きありがとうございます。前便で申し上げました通り、毎週木曜日はボランティアの日になつております。日本にきた外国人に、日本語を教えていきます。片言しか話せない人たちが、慣れない土地で働きながら日本語を学びに来ます。疲れた体で、勉強に来る彼らの姿がとても美しいものです。こんな老人でも、彼らの力になれるとと思うと、大変うれしく参加しています。今のところ、希望者が多く、教師役が不足しています。

また、第五木曜日のその日は、通常の授業の他に当番的な役割がある日なので、特に休めない日となっています。折角のお誘いをお断りするのは心苦しいのですが、そのあたりの事情も斟酌いただき、今回はご寛恕いただきたくお願ひ申し上げます。これから暑い季節に向かいます。また、梅雨もやつてきます。体にくれぐれもご留意ください。先ずは、お礼かたがたお詫びまで。

平成二十八年五月二十七日

敬具

林 半寿拝

(まことにご丁寧なお便り恐縮に存じます。作品は作者の手を離れたら皆さまのものと心得ております。木曜日の日のことよくわかりました。半寿さんの生活リズムを第一にお考えになりました。それに合わぬ場合は打つちやつてください。  
前略、「白金葭」合同句集拝受致し 247 頁の大冊に驚きました。これは編集も大変だつたことでしよう。足

跡の記録として貴重なものになることと思います。同人の青木啓泰さんは会つたことは有りませんが、昔から名前は知つております。佐藤豹一郎といえば判るでしょう。また荻原洋灯さんからも啓泰さんのことはよく聞いておりました。句風から察しますと旧「暖流」の人が多いのはと見て います。大兄とは山梨の赤沢宿以来ですから、6月30日の祝賀会を楽しみにしています。簡単ながら御礼まで。草々 (52 平野ひろし 前略) 白金葭のご送付ありがとうございます。素晴らしい句集を手にして感服やら驚きやら正しく敬服致しました。句集編纂を終えて源氏復帰の由、いずれゆつくり語り合いたいものです。なお祝賀会のお誘い、出席は畏れ多く、盛会を祈っています。草々

(31 伊藤安徳)

光成さん丁重なるお便り元気づけられました。合同句集すばらしい完成、唯々喜ぶばかりです。光成さんの苦労に頭がさがります。銀座句会どうしても無理と思われますので、失礼もうします。平野ひろし先生にもよろしくお伝え下さい。成るほど俳信があるなら心強い。御盛会を。一身二生と思って前進です。不一一  
平成二十八年六月三日 青木啓泰

青嵐病院食に芋が出る（啓泰）  
拝啓 白金葭五周年記念号おめでとうございます。

ありがとうございました。ありがとうございました。各地で梅雨入りアジサイ（紫陽花）が美しい季節となりました。土の酸性の度合いによって藍色からピンク色までさまざまな色を咲かせる。我が家アジサイもつぼみがだんく大きくなっています。その麗しい姿は古くは万葉集にも歌われた。六月を象徴する花といえよう。紫陽花の一片一片は小さいがそれがひとつに固まって手毬のような可憐な形になる。さらにその手毬が色とりどりに集まつて美の供宴を届けてくれる。ちょうど田植時季です。今年も悩んだ末一反ほど田植をしました。誰に頼むことはなく一人ですませました。昔のように家族で並んで手で植えることはなくなり、皆乗用田植機で植えています。私は歩行用で一日かかってゆつくりとすませました。今後は水管理だけになった。が過疎地に住んでいるので家廻りや畠の雑草処理に苦労しています。五月末から今月にかけてちょっと忙しくしていて白金葭全部はまだ読んでいませんがこれからゆつくりと読ませてもらいます。何か五周年記念で色々と忙しそうに見受けます。体をいとい乍無理しないよう祈ります。いろいろと本を読んだり頭にあつたことを書きました。敏子さんむりしないようゆつくりとゆつくりと。

敬具（6・5 健三より）

### 田植機のエンジン軽く足重し（健三）

（田を植ゑる兄さんの姿が目に浮かぶ佳句だと思います。本は字が小さいので少しずつお読みください。高志）

（璃子さんの手紙）拝啓 ごぶさたの中に梅雨に入りうつとうしい日々となりましたがお障りなくお過ごしの御事と存じ上げます。このたびは、すばらしい「俳句とエッセイ」お贈り下さいましてありがとうございます。白金葭五周年記念号のご上梓心よりお祝い申し上げます。五月末に頂きながら、雑用と招かざる客と申しますか、人出入り多くゆつくり拝読もできぬまゝ、日ばかり過ぎて御礼もお祝いも遅くなり、申し訳なくおはずかしい限りでござります。全二五〇頁にもなる「大白金葭」ゆつくりゆつくり鑑賞の楽しみが出来ましたが、並々ならぬご苦労でのご上木でお疲れが出来せんようにと願っております。表紙が淡いうすみどりにこれ又淡く白金葭の文字が浮き出て、裏表紙につゞく円型は白い“月”か、そして四月十五日の白金葭、空の青と相俟つて、ほんとうにいきくとすばらしく、光成様が跋に記された「高令者の集まり」を感じさせないすばらしさに先ず驚きました。俳句撰集他、句についての感想などは自分の心にひゞくまゝ、申し上げられても一三一頁以降、芭蕉の軽み以後に始まるエッセイ集など申し上げるべきこと何もなく皆さまの知識

の豊富さ、勉強の度合いなどぐ、拝読が精一杯手も足もでません。私めのハガキ句のいくつかは全くお恥ずかしく身が縮みます。今はたゞこれだけの記念号におかけになつた光成様の情熱の余韻の中で時間をかけて拝読いたします。白金葭五月号、若冲展、夏場所など季節感タップリの御句もあり楽しんでおります。もはやお目まだるいとは存じますが、最後にみち様への私信のご掲載は見知らぬバアサンの手紙などバカバカしいと思し召される方々多数と思ひますのでどうしたものやらと悩みが増えました。いつまでも生きていたる為に、つまらぬ昔の話など思い出しました。その中書けるかも知れません。出版記念祝賀会、お声をおかけ下さったこと、ありがたく存じますが、光成様みち様飯田様小山様の他の方々にはお会いしたこともなく人見知りにてその場に出ること覚束なく、ご遠慮申し上げます。ご上梓お祝い心ばかりお受け下さいました幸甚に存じます。ご盛会をお祈り申し上げます。

かしこ

光成高志様

六月六日 長屋璃子

(璃子さんはお気づきになつておられませんでしようが、紫式部からいただく手紙のようで、心わくわく読んでおります。ありのままで自由にお書きになり、どうか文通ができますように思います。この度のお心遣いありがとうございます。銀座句

会は当日でも間に合いますのでよしと膝を打つてお越しになられたらうれしいです。(高志)

前略 ご無沙汰しています。此度は白金葭五周年記念号を私にまでお送り下さり恐縮しています。貴兄のご努力にて立派な記念号を発刊なさり敬意を表します。私は体調をくづし一ヶ月入院今体調の回復につとめております。六月三十日の吟行は他用と重なりお伺いできません。申訳ございません。以上記念号の発刊を祝し、益々のご発展を願つて簡単乍拝受の御礼とさせていただきます。(草々)

(六月八日 伊藤一艸人)

春光や白金葭(高志)季節の移るのは早くですがすがしい緑からあつていう間に四周は茂りに覆われました。合同句集『白金葭』ご上梓およろこび致します。こじんまりとまとまつた結社の楽しい雰囲気が伝わります。吟行を共にされる皆様の御句のそれぞれの目の置きどころもたのしいですね。吟行地も私からみれば新鮮です。黄金週間上野の森といふ器(みち)あちこち足を運ばれて時間をかけて俳句の奥深くまで追求された一集と思われますので、すべてに目を通すのはかなり日数がかかりそうです。ゆっくり拝読させていただきます。(中略)句風は少し違うかもしれません、光成さんと同じ道をめざしますのでよろしくお願いします。貴重なご本をお贈りいただきありがとうございます。

ございました。お礼申し上げます。かしこ

(6・10 藤本始子)

記念号ありがたく頂きました。机上にありますがまだ手にとつてじっくり見ていません。甚だ申訳あります。17日30日に古代と「おめでとう」を送ります。そして今月は1万円を会費として同封致します。益々皆々様方が御健康であることを祈りあげます。(中略)8月は句会がないようですね。お差支えなれば八人位で梅の花で食事をしませんか?(夕食の弁当つきにします。一一・三〇からです。私の知らない人でも結構です。)

(6・13日 小山陽也)

(またうれしいお誘いありがとうございます。8月19日(金)に設定して、この会報にて知らせました。)

白金葭五周年記念号上梓おめでとうございます。お二人で上品で格調高い本を出され本当にじょうらう様でした。私の稚拙な句も入れて下さり有難うございます。(中略)祝賀会はまだ体力不足で自信がありませんので欠席です。どうぞ盛会の様子を楽しみにしております。先にわざながら入金をいたしました。

(6・16 紀子)

光成さん 白金葭の句集をお送り下さり有難うございました。句会やはがき句集の長年の積み重ねが見事に結実したもので、ご趣味とはいえその御努力に心か

ら敬意を表します。また十年先の出版を目指されることに頭の下がる思いです。自らははからずの言葉も見えましたが、自然体でご精進下さい。ぼちぼちと

一読させて頂きます。

(16小野 勝士 Eメール)

前略 光成様 先日は突然貴重な本を贈つていただきまして有難うございます。まだ全文を読んでおりませんが、最初に“この歳になつて毎日が楽しく思える様になりました”とあつたことに感銘を受けました。私はこの一月で68歳となり、五月末で全ての仕事を終了しました。6月からは毎日が日曜日状態ですが、今のところ何かと忙しい日々をすごしております。少し落ち着いたら、絵とか俳句(?)にチャレンジしようかと思つております。更に、今後の人生は少しでも社会の為にすごしたいとの思いと、社会の不公平な部分を少なくともその責任の無い子供達の手助けが出来ないかと考えています。光成さんは自らの情熱を形にされ、かつ、仲間をまとめられて大変立派だと思います。これからも様々にお知恵をいただければ幸いです。まずは御礼まで。

(2016.6.17 山下雅己)

冠省 昨日(6月14日)「白金葭合同句集・俳句とエッセイ」一冊拝受致しました。ずっとしりと重い247頁の句集の内容に感銘をうけました。ゆっくりと大切に読ませて貰います。本当に有難うございました。

不一（6・18　窪田充華）

今年も真夏がやつてきました。このたびは立派な句集をお送り戴きまして、祝福申し上げますとともに厚く御礼申し上げます。別便にて小生のお祝いの気持ちをお贈りしました。さゝやかですが、ご賞味下さい。益々御健吟の程を。＊プールでご在宅日確認してからActionとります。

遅れ馳せ、駄文（一句鑑賞）をお届けします。何かとお手数をかけますが、よろしくお願ひ申し上げます。荒れ梅雨の報が伝わります、ご夫妻には、共々、御身お大切にご健吟の程を祈りあげます。（6・21孝二）

飯田孝三様 益々お元気の御様子にお慶び申し上げます。此度は、句集「白金葭」を御恵贈下さり誠に有難うございました。味わい深く洗練された言葉に溢れ、美しく趣のある、また迫真的光る数々の句に息を呑み、感動致しました。個々の句から受ける感動の御札を申し述べるべきでしようが、俳句にも不勉強の小生には、とても資格はありません。エッセイも楽しませて頂きました。こちらも、乱筆拙文を意に介せぬ輩の、お役に立たぬ感想でありますが、思いつくまま以下に書きます。失礼は御容赦願います。

（一）「文化と風土」 同義語の「土砂降り」（cats and dogs）につき文化風土の違いや、聴覚に関わる共感を

語る面白い文です。加えて「篠突く雨」では一切の物音を消し、雨足の鋭さを目でとらえる表現も日本の美意識とされ、それは高緯度の西洋にはなかろうと、風土が生んだ文化と指摘される洞察力はお見事と、大いに敬意を表します。また「眠れずに」の作者は、ユニークにも巨象の形をなぞつて眠りにつくようですが、普通には外来の「羊を数える」ですね。しかし、英国はロンドン郊外のテムズ川上流沿いの広大な牧場で草をはんで点々と散る羊であればこそで、日本では羊は小牧場に群れてうごめくもので、とても数えられるものでなく、数え始めたとしても眼は冴えてしまうとは、愉快ですね。

（二）「名句散策」 芝不器男「あなたなる」の句は、意図された音律の効果が「落ち込み」「暗鬱」を深め、どうもこれはただの「望郷」ではなく、郷里の「我が家、わが母」を思うのではないか、と三圃さんは指摘します。それは作家が別の句「秋の夜や」で詞書したように、遠く離れた故郷で、青春に悩む作家を気遣う老母の心情を思いやつてているのだと捉え、その上で、この「憂悶」の句にも、「自然の写生」派もたじろぐほどの激しい「情懷の写生」が出ていると、不器男の句の核心に迫っています。俳句の評は、二二まで深く詠みこんで書くべきものかと、小生は驚きました。

（一三）「日本と台湾」 小生もかつて台湾で、八田与一氏の偉業のことを聞きました。私たちと同世代の台湾の人たちは、国共内線の結果、大陸から移り住んだ「国民党」軍に対する反感が消えぬまま、日本統治下時代の評価を高めていたのですが、それも半世紀たつた今でも親日であることは、半端じやなくて、貴重な関係として後々までも大切にしたいものです。それは決して、台湾側の思いだけではなく、当時現地で活躍した氣概と大いなる夢に満ち溢れた若き日本人たちの薄く種が芽を出し、葉が出、花をさかせていることでもあります。言うまでもないことですが、もう一世紀も前の日本は、初めての植民地「台湾」の運営を、列強に伍す立派な統治をしたいとの思い入れを強くもち、若くして有能な政治家、官僚たちを積極的に用い、現地赴任の彼ら自身も使命感に燃え、勇往邁進し、それに民間人も呼応し馳せ参じたのでした。貴兄の力強い文章を拝読し、特に、日本近代史を照らす、誇るべき輝きなのだと、あらためて感動しました。

以上、久し振りに俳句を集中して読ませて頂きました。飯田さんは今素晴らしい日々を送つておられますね。御健勝と御活躍をお祈り致します。御好意を心から感謝致します。

（一〇一六・6・10 山田義雄）

前略 青梅雨の候

ますますお元気の由何よりとお

喜び申し上げます。過日は素晴らしい句集を賜り誠に有難うございました。併せ五周年記念お祝いを申し上げます。かなり前に“原研OB会報”で飯田さんの句を拝見した事がありますが、こんなに俳句に熱心に親しまれているとは思いもよりませんでした・・・むかし俳句にのめりこんだ頃の“わかさ加減”もなつかしみつつ、嬉しく拝見させていただきました。感想とは程遠く、恐れ多いばかりですが、“いあんばい” “兼題句”から七句を上げさせていたゞきました。私は今は地域の小役を努め、海岸散歩など年齢相応に送つております。飯田さんにはくれぐれも健康に留意され俳句の謳歌・健吟を心より祈っております。先ずは右お札今まで申し上げます。敬白 平成二十八年六月 大内文光

飯田孝三様

“いやんばい”

蛤汁のとろみ洛中洛外図

兄従兄茄子の馬に乗りきれず

武者人形衛兵の人形並べたる

麦秋の木馬の眼青く塗る

芋嵐土間内かまど吹きこぼれ

蒟蒻掘る上毛三山どんと晴れ

湯たんぼやこの足踏みし山や川

“兼題句撰集”

林檎生る天地たわむばかりなる

スカイツリーを股挟み出初かな

江戸前の鮎の放流山深し

仲見世に人ら混みあふ花曇

怖づ怖づと舳先紅蓮白蓮

折鶴の嘴尖る秋思かな

バレンタインデイ東京や春一番  
（以上大内丈光抽出）

「白金葭」ありがとうございました。貴兄のご活躍  
うれしく拝見いたしました。小生、近頃は碁将棋麻雀  
その他すべて休業、近所歩きと昼寝と酒、つまり何も  
やつておりません。我が家付近は「水色」という色も  
なき「清水」の湧ぐところ多摩川附近結構な散歩道が  
あります。御礼まで御健勝にて 草々（6.吉澤奎介）

前略 先日下旬から札幌に出かけ先週帰宅したところです。留守に大兄ご主導の句会句集をお届けいたゞ  
き、大変光栄に存じます。たゞ、早速有難く拝読させ  
ていただいておりますが、生来この種の素質素養を欠  
く小生には亡羊の嘆きを免れません。今後折りにふれ  
ご教示の程よろしくお願ひいたします。来月の落語会  
でお会いできれば幸甚に存じます。御身お大切に。草々

（12 小野寺哲也）

受贈誌（H 28年6月号）

略 この度は句集「白金葭」を御贈呈下さり誠にあ  
りがとうございました。無教養故、俳句のことは、ド

孝三

素人ですが、大兄の秀作を何回か音読すると、ほんの  
ちょっとびり真髓に触れ得たような気がします。

三歳で逝去された弟様に対する愛惜の念は、心を打

ちます。初めて知った事実です。また、遙か55年前に拙宅が没落したときに小生と妹の本の一部を寄寓されておられた荒川の姉上様宅で一時預かっていただいたことを思い出します。享年81歳とは、無念です。前夜夢をみられた姉上様も大兄とおなじく俳道を歩まれておられたのですね。今年も猛暑日続きでしよう。お互に「熱中症」には、用心、用心。早々（6.赤間行三）

拝復 ごぶさた致して居ります。俳誌「白金葭」五周年特集号の刊行おめでとう御座います。お互いに敬うお仲間の合同句集をお送りいただき・・誠に有難うございます。俳句とエッセイというもののいいですね。俳句は「座の文芸」を実践されて居られる先輩はじめ、皆さんに敬意を表します。お蔭様で「航」俳句会も何かと順調にやつてます。いま秋の俳句大会の準備で忙しくしてます。はがき句報、エッセイ集・・じつくり読ませて戴きます。まずは御礼ま・・。敬具

（6.5 田中勝）

青棚田離宮に下と上と中（彩129号）

平野ひろし

声あらばさざめきをらむ蝶の昼(〃)

休漁の朝も漁師ら浜焚火(〃)

佐藤恵子  
平山三郎

〃

枯芝のブラックホールどんじ跡(〃)

小泉博

〃

半眼の猫丸椅子に草餅屋(あすか6月号)

山尾かづひろ

〃

ばおふりや愛と云ふこと忘れたり(〃)

(東京グラフ6月)

璃子

〃

麦の秋送電線は山越ゆる(〃)

文男

〃

梅天や病臥の人の指細り(〃)

璃子

〃

### こだま

鳥曇ピカソの目鼻点四つ(彩129号)

光成高志

〃

(山尾かづひる吟行ノートH28・06・08)

飯田孝三

〃

巴里祭近づく朝パセリセロリ

光みち

〃

ががんばの叩きのやうに障子打つ

光成高志

〃

蟻の巣を寄せ付けてをりパセリの根

### 我孫子日記

5/20	例会		
* 5/21	東松戸		
5/24	句集着		
5/25	SOA		
5/26	送付		
6/1	SOA		
*2 6/2	芝離宮		
6/8	SOA		
*3 6/9~6/10	富士休暇村		
6/15	SOA		
6/17	例会		

外はビル椎の根方に沙羅の花  
音たてゝ水子地蔵の風車  
墳頂の地図の碑の上蜥蜴這ふ  
つばくらめ富士休暇村よく晴れて  
額鬚の山羊のつむじや山法師  
蠅払ふ耳もて羊草咀嚼  
五月晴馬に跨り引かれ行く

編集後記

今月は合同句集の反響があつて、二〇名の方々から手紙・はがきを頂きました。どうか読まれましたら感想なりをお送り下さい。本誌に掲載して次の刊行に反映したいと存じます。昭七さんのエッセイ稿(宮沢賢治)を既に頂いています。私の芭蕉以後も次の塚へ進むつもりです。とまれ、三〇日がすぐそこにきていますので、この日を節にして、次の一〇周年に進みたいと思っています。当日本誌と先の合同句集をお持ちになつてお集まりください。お待ちしております。

\*下総に竹紙房あり竹落葉  
竹紙にてはがきを作る若葉風  
\*2 夏萩の萩の小道をそぞろ行く  
薰風や蓬莱島を上り下り

高志  
みち  
高志

白金霞(6月号)(第64号) 平成28年6月発行  
編集・発行人  
発行所 270  
1119 光成高志 (〇四一七一八七一〇六八)  
表紙の題字 加納綾女  
写真 6月  
24 日の白金霞